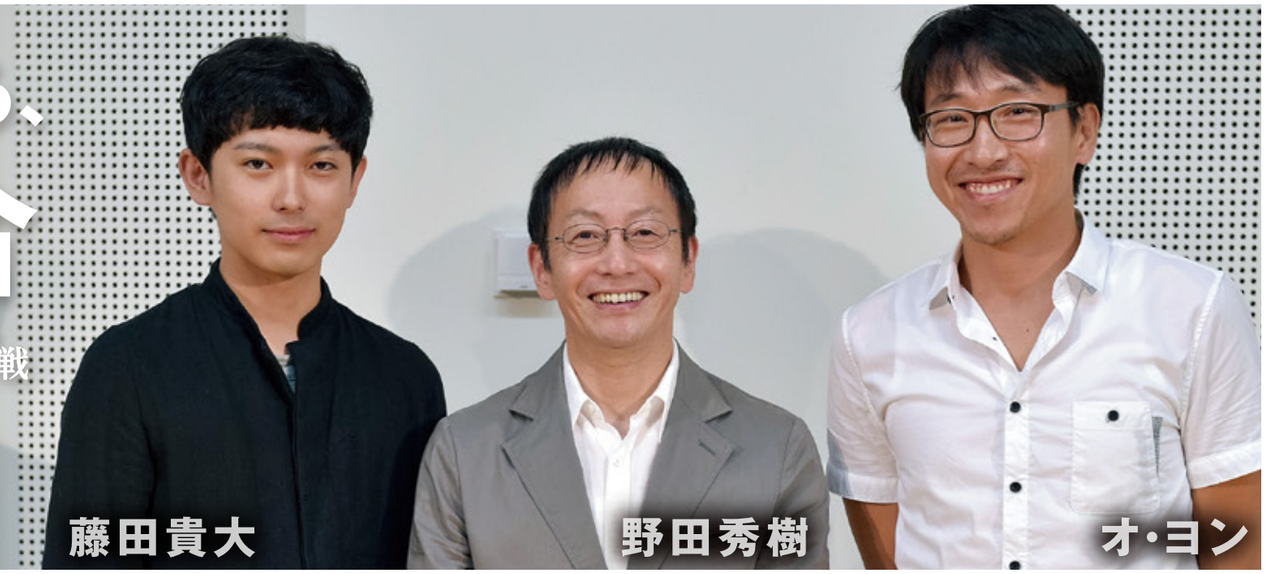
東京芸術劇場ボックスオフィス 0570-010-296（休館日を除く10:00～19:00）

2つの野田戯曲が探る、越境と融合

秋のプレイハウスを彩る、華やかで果敢な挑戦

野田秀樹芸術監督が80年代に書いた戯曲が、今秋、2作続けて
プレイハウスで上演される。高い注目度を反映して
賑やかに行なわれた懇談会をレポートする。



TAKAHIRO FUJITA × HIDEKI NODA × OH YONG

異なる世代、異なる言語

9月から10月にかけて連続で上演される『小指の思い出』と『半神』の制作発表を兼ねた懇談会が7月10日に行なわれた。

登壇したのは、2作を執筆し、15年ぶりに『半神』を演出する野田秀樹。日韓共同制作である今回のプロダクションは、すべての役を、野田が現地開催したオーディションで選んだ韓国人俳優が演じるが、その中から、かつて野田が演じた老数学者を演じるオ・ヨン。そして『小指の思い出』に挑む、気鋭の劇団マームとジプシーの演出家・藤田貴大。

3人の生の言葉を聞こうと多くの記者が会場に集まった。和気あいあいとした雰囲気の中にも、この2公演に熱い注目が寄せられたのには理由がある。それは『小指～』には世代とジャンルの、『半神』には国境と言語の、越境と融合が期待されるという点だ。

野田さんが築いたものを更新する

『小指～』の初演時、まだ生まれてもいなかった藤田にとって野田は、同時代人であると同時に、伝説だった。

「中学生の時に、演劇部の顧問の先生が持っていた夢の遊眠社のVHSを観たのが、最初の出合いでした。テープの伸びた『野獣降臨（のけものきたりて）』『半神』『小指～』を観て、特に『小指～』は何度も観て、僕は北海道なんですが“東京ではこんな芝居をやっているんだ”と興奮しました。そして18歳で上京して、東京で最初に観たのも野田さんの『透明人間の蒸気（ゆげ）』（04年）だったんです。影響を受けているかどうかはわかりませんが、演劇を続けてきて、野田さんの存在はどうしたって（意識から）消えるものではありません」

昨夏、シアターイーストで作・演出した『cocoon』で、一気に若手演劇人の最前線に躍り出た藤田。劇作家としては3年前、26歳で岸田國士戯曲賞を受賞、野田はその時の審査員だった。

「若いのになんでこんなに隙のないものを書くんだ、というのがその時の感想でした。そう簡単に賞は獲れないぞ、とイチャモンも考えたんだけど（笑）、なかなか欠点が見つからなかった。非常に才能のある人だとわかっていますし、あまり上演されない『小指～』を選んでくれたのもうれしい」

と、野田。しかし藤田は、野田を「ライバル」だとも言い切る。

「僕が今、野田さんの戯曲を演出することの意味を考えたら、尊敬しているだけじゃダメなんです。野田さんにはないもの、野田さんがやってないことを探して、野田さん達が築き上げてきたものを上書きしなければ意味はないと思います」

ちょうど30歳の年齢差があるふたりが『小指～』を通してぶつかり合い、違う部分と同じ部分を明らかにしながら混じり合う。勝地涼、松重豊、飴屋法水、青柳いづみら、様々な出自のキャストが藤田の手腕によってどうまとまるかにも注目したい。

韓国人俳優と身体性を追求したい

そして国境と言語にその課題を担う『半神』

だが、野田は自身の作品と韓国の相性の良さを過去に実感している。

「10年くらい前、自分も出演して韓国の役者と『赤鬼』をつくり、去年は『THE BEE』をソウルの劇場に持っていきました。韓国は“おもしろかった”という気持ちを伝えるのに足を踏みならすんです。最初にそれが起きた時、すごいブーイングかと思ったら、感動しているんだと。その日に自分が受け取った感覚は、いまだに残っていますね。そして韓国の役者は層も厚く、身体能力が非常に高い。年を取ると、無意識に作品のフィジカリティを抑えてしまうんですよ、自分が動けなくなっているから。韓国の役者となら、そこにもう1度挑戦できるんじゃないかと思いました」

結果的に、予定よりも年齢が高めのキャスティングになったそうだが、

「あるベテランの女優さんが、主役じゃないと仕事を引き受けないような構造に自分がハマっているのが嫌で、これをきっかけにいろんなことにチャレンジしたいと受けにきてくれた。そういう人が集まって、とてもいい座組が組めたと思います」

と自信を見せた。そのひとりであるオ・ヨンは韓国版『赤鬼』にも出演していて、今回が2度目の野田演出となる。

「韓国ではこういうオーディションはほとんどないんですが、『赤鬼』も今回も、野田さんのオーディションはとても刺激的で楽しかった。ただ今回は、以前やっている自分は不利だろうと思っていたので、こうして合格できたことが、まるで夢みたいです」

と謙虚に話すが、韓国の舞台では実力派として知られる存在だ。

「もちろん、前から知ってるから選んだんじゃないんですよ（笑）。フェアな目で見て、オ・ヨンは懐の深いゆったりとした芝居が出来る人。彼が出てくると雰囲気が変わるんです。アドリブも上手いし、老数学者は演出家という一面もある役なので、オ・ヨンにやってもらえたら心配はない」

衣裳のひびのこづえら、プランナーはいつもの野田のパートナー達。彼らが日本語で発話されない『半神』にどんな刺激を受けて新しいクリエイションを見せるのか、その点も楽しみに待ちたい。

取材・構成：徳永京子

「半神」出演者 俳優 オ・ヨンに聞く

今回チャレンジするのは、以前、野田さんご自身がされていた役ですので、正直ほんとうに自分にできるかな、という不安でいっぱいでしたが、決まってしまったからにはやるしかない、と思っています。（笑）

野田さんは「このようにしてください！」と演技指導をすることは少なくて、いつも「気楽な感じでやってみたら？」と言ってくださるので、とても落ち着いて演技に向き合えますし、俳優に対する信頼がしっかりとあることが感じられて、とても気持ちがいいです。初めて台本を頂いた時は、正直、話も複雑でまったく意味が分からなかったのですが、友人が原作のマンガを貸してくれ、少しだけ光が差しました。（笑）『半神』という作品は、人のアイデンティティを問う作品。この作品を通して、それぞれの人が自分のことを見つめ直すきっかけになればいいな、と思います。東京公演をとても楽しみにしています。

東京芸術劇場 × 明洞芸術劇場
国際共同制作「半 神」 詳細はP12へ

原作・脚本：萩尾望都　脚本・演出：野田秀樹
出演：チュ・イニョン　チョン・ソンミン
オ・ヨン　ほか

東京公演：
10月24日（金）～10月31日（金）
（27日は休演）プレイハウス
韓国公演：9月12日（金）～10月5日（日）
会場：明洞芸術劇場（韓国・ソウル）
http://www.mdtheater.or.kr/home/main.aspx

東京公演　主催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
東京都／東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）
共催：明洞芸術劇場／独立行政法人国際交流基金
韓国公演　主催：明洞芸術劇場
共催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）、
独立行政法人国際交流基金
企画協力：NODA・MAP　株式会社小学館　オフィシャル・エアライン・ANA

「小指の思い出」 詳細はP11へ

9月29日（月）～10月13日（月・祝）
（10月1日と6日は休演）プレイハウス
作：野田秀樹　演出：藤田貴大

主催：東京芸術劇場（公益財団法人東京都歴史文化財団）
東京都／東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）
助成：平成26年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業

演出家・吹越満の衝撃作、待望の再演!

ビジュアルの魔術師ロベール・ルパージュの名作を、見事なオリジナル演出で舞台化し、演出家としての並はずれた才能を開陳した吹越満。幻のフキコシ版『ポリグラフ』がブラッシュアップして帰ってくる。

R.ルパージュからM.フキコシへ

「これがあの”ルパージュ・マジック”で名高いロベール・ルパージュの傑作。もちろん、演出もルパージュだよ」

と、さりげなく嘘を混入されたとしても、これを観た後なら疑わなかっただろう。2012年12月、シアターイーストで上演された『ポリグラフ―嘘発見器―』。ロベール・ルパージュという、フィジカルと平面、ハイテクにローテクと、あらゆるビジュアル要素を駆使して独特の舞台空間を現出させる世界的アーティストの、初期の名作(構想・脚本:マリー・ブラッサール/ロベール・ルパージュ、1988年初演)だ。

脚本と演出が不可分の作品ゆえ、演出だけ他の誰かがやるなど想像もつかなかったが、実際その演出は、見事に“ルパージュ・マジック”への期待に応えてあまりある素晴らしさだった。この、ウェットさの微塵もない、クールで尖鋭で、高度に洗練され、美しく深い孤独を湛えた舞台が、俳優吹越満の演出だったとは!いったいこの並はずれた才能を、いままでどうやって隠してきたのだこの人はと、呆気にとられるほどだった。

もちろん、まったく想像がつかないわけではない。WAHAHA本舗在籍中の1989年から始めた『フキコシ・ソロ・アクト・ライブ』では、映像や生身の肉体の可能性を探りながら、板の上でひとり、笑いを産み出すことに向き合い続けてきたし、フランスのフィリップ・ドゥクフレ、英国のサイモン・マクバーニー、それに野田秀樹といった、名だたる身体表現の達人たちの作品への出演で、数多の貴重な体験を積んできたのも大きいことだろう。初演の公演パンフレットで、自ら「お芝居というものに関わって28年のフキコシ」は「『ポリグラフ』を作るのに28年かけたと言えるのか……」と、初演出(ソロ・アクト・ライブを除けば)の弁を記していたけれど、まさに貯めに貯めてきたアイディアと技術の成果を、最高の形で初披露したのが、フキコシ版『ポリグラフ』といえる。

ベルリンの壁、検死報告、ハムレット……

ケベックシティで起きた、ある殺人事件。政治学の学生フランソワ(森山開次)は、容疑者としてポリグラフにかけられ、犯罪学者ディヴィッド(吹越)は、そのポリグラフテストを担当し、小劇場の俳優ルーシー(太田緑ロランス)は、事件を題材にした映画に、殺された女性役で出演することになる――。

日本人になじみがあるとは言えない、カナダのフランス語圏の街を舞台にした話を、吹越は、戸惑う観客の手を取るようにやさしく、隙あらばユーモアを注入する姿勢も忘れずに、シャープなビジュアルセンスで描き切る。ベルリンの壁、検死報告、『ハムレット』のせりふ。こうした3人それぞれの過去と現在を象徴する体験や日常が、事件をキーワードに据えることでおもしろいように符合してゆく展開は、スタイリッシュなミステリーでもあり、言葉に頼る演劇をあざ笑うかのような、視覚で見せる心理劇とも言える。またはルパージュの世界を材に取った、フキコシ・ソロ・アクト・ライブの進化形と言っても、いいかもしれない。

ルパージュ作品によってもたらされた、才気溢れる演出家・吹越満の誕生。今度はルパージュからフキコシへと関心をしっかりと移して、その演出にさらに注目したいと思う。

文:伊達なつめ

©引地信彦

「ポリグラフ ―嘘発見器―」

10月19日(日)~11月2日(日)
シアターイースト
詳細はP12
構想・脚本:マリー・ブラッサール/ロベール・ルパージュ
翻訳:松岡和子　演出:吹越 満
出演:森山開次、太田 緑 ロランス、吹越 満

森山開次

太田 緑 ロランス

吹越 満

主催:東京芸術劇場(公益財団法人東京都歴史文化財団)
東京都/東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)
著作権代理:(株)フランス著作権事務所
平成26年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業　平成26年度(第69回)文化庁芸術祭参加公演